

## アジアにおける「仏教ルネッサンス」を考える アマルティア・センの人間開発論などをヒントに

横浜国立大学経済学部 山崎圭一  
2007年10月20日(土曜日)  
10:00~12:00  
妙深寺にて(横浜市三ツ沢上町)

### 1 社会行動仏教 (Socially Engaged Buddhism): 人々をエンパワーする

#### 1-1 アジアにおける社会行動仏教と仏教ルネッサンス

アマルティア・センがいうように、経済学の最先端の1つは、あきらかに人間開発論になっています。人々をエンパワーする。これと、アジアにおける「社会行動仏教」「仏教ルネッサンス (Buddha Rising)」の動きが連動します。これについては、たとえば米国『ナショナル・ジオグラフィック』誌の2005年12月号が、アジアの「仏教ルネッサンス」を特集しています。これに関して、以下の2文献が重要です。

- 西川潤・野田真里編著『仏教・開発・NGO』新評論、2001年
- 野村亨・山本純一編著『グローバル・ナショナル・ローカルの現在』慶応義塾大学出版会、2006年の中の、野田真里「(第7章) グローバル危機と社会行動仏教による人間の安全保障」

いずれも、アジアの仏教を論じている経済学をふくめた社会科学の学術書である。経済学、社会科学は、ここまで仏教に近づいてきているのである。以下キーパーソンだけを書き出しておく。

<タイ>

- ・スリチャイ・ワンゲオ (Surichai Wan'geo): タイの東大、チュラロンコン大学准教授。仏教によるオルタナティブな発展の代表的知識人
- ・スラック・シワラク (Sulak Sivaraksa): サンティ・プラチャ・ダンマ研究所所長。仏教によるオルタナティブな発展の代表的知識人
- ・プラウェート・ワシ (Prawase Wasi): マヒドン大学教授
- ・故ブッタタート比丘 (Buddadasa Bhikku): 代表的学僧。スワンモーク(解放の園)という道場を開いて、仏陀に帰るというアプローチをひろめ、「仏法共同社会主義 (Dhammikka Sanghamniyama)」を提唱した。
- ・パユット師 (Phru P.A.Payutto 法名はプラタマ・ピドック): ブッタタート比丘にならぶ、学僧。こころの「開発(かいほつ)」概念を深化、普及。
- ・ナーン和尚 (Liang PoNan、法名ピピット・プラチャーナート師): 開発僧の泰斗。自分の村のターサワーン村の貧困化に直面し、住職を務めているターワーン寺にみずかの名前を冠した NGO「ピピット・プラチャーナート基金」を設立。人々の中心になって、村の貧困解消の闘いの先頭にたった。

3本柱 = 精神の開発、人間の開発、村の開発

(これを野田氏は、心の開発、人間の開発、社会の開発と読み替えている)。

とくに社会開発については、共同体としての sangha の復興を重視。

プロジェクトを立ち上げた:

米銀行(サハバーン・カウ)

友好の米づくり(これには TICD [開発のための宗教委員会] が支援)

米のオルタナティブ・トレード(スイスの NGO である OS 3 と協力して輸出)

こうしたナーン和尚の動きは、NGO であるセーキヤ・タム(開発のための仏教連合)を通じて、根付きつつある。

- ・プラチャック師（森林僧、開発僧）：環境保護運動家。「木の出家」運動をした。これは、木に神聖視されている黄衣を結びつけて、伐採を防止しようとするもの。政府との緊張関係が高じて、僧籍を国家から剥奪されてしまい、現在は還俗されている。
- ・ピタック師：「木の出家」運動＋禁漁区設置による森林保護
- ・スパ・ジャワワット師：禁漁区設置による森林保護と薬草治療。
- ・パーイ村長（もと僧侶で、プリラム県サクーン村村長）：循環型農業を提唱

#### < ベトナム >

- ・ティック・ナット・ハン（釈一行）師：「社会行動仏教」(Socially Engaged Buddhism) を提唱。この engaged は、私もよく軽くつかっているが、行動派の実存主義哲学者 J.P.サルトルの「アンガージュマン (engagement)」に由来するらしい。  
フランスに、仏教コミュニティである「プラム・ビレッジ」を開校。ノーベル平和賞に推奨されたこともある。

#### < カンボジア >

- ・ヘン・モニチェンダ師 (Heng Monycheuda)：カンボジアを代表する開発僧。現在は還俗。難民キャンプ（カンボジアの内戦で多くが難民化した）での活動を通じて、社会行動に参加するようになった。1990年に故郷バットバン州で NGO「開発のための仏教 (BFD)」を組織。
- ・マハ・ゴサナンダ師：カンボジア仏教界大僧正で、内戦中、「法の行進 (Dhammayietra)」を組織。インドのナーランダ大学に学び、マハトマ・ガンジー翁や、日本の「日本山妙法寺」山主・藤井日達上人と親交を結ぶ。1978年にサケオ難民キャンプを訪ねて、同胞の苦を目の当たりにし、支援活動をはじめた。カンボジアの NGO の連合体である「ポンルー・クメール」の名誉顧問。
- ・ニェム・キムテン師 (Nhem Kimteng)：スヴァイリエン州で活動。マハ・ゴサナンダ師の薫陶を受ける。「法の行進」に参加。NGO「シャンティ・セナ」を設立。イギリスのかの有名な OXFAM やフランスの CIDSE、日本のシャンティ国際ボランティア会とも連携。

#### < インド >

- ・故 B . R . アンベードカル博士：みずからが指定カースト（不可触民）の出身。ロンドン大学経済政治院 (LSE) やコロンビア大学で学び、インド独立後は初代法務大臣に。インド憲法を起草。ヒンズーを容認したマハトマ・ガンジー翁と対立。新仏教運動を開始。1955年にインド仏教徒教会を設立。日本人の佐々井秀嶺師らが、遺志を受け継いで仏教への改宗運動を促進している。(参考文献：B . R . アンベードカル著、山際素男訳『ブッダとそのダンマ』光文社、2004年)
- ・サンガラトナ・マナケ師 (Sangaratna Manake)：パンチャメッタ協会代表。日本留学をして、天台宗僧侶として出家。天台宗の NGO「一隅を照らす運動」と連携しつつ、インドの子どもたちの教育支援に取り組む。

## 2 「内発的発展論」との接続

このアジアでの「社会行動仏教」は、経済学的には「内発的発展論」といいかえることもできます。海外からの資本だけに頼るのではなく、地域の資源をいかして、「村おこし」「まちおこし」をしていく開発方式で、その研究の系譜は内外でいくつかあります。

- ・西川潤教授の「内発的発展論」
- ・鶴見和子教授の「内発的発展論」

・宮本憲一教授、中村剛治郎教授らの「内発的発展論」：日本の大手企業誘致型の地域開発の失敗の経験（とくに水俣や四日市や尼崎や倉敷など、公害が増えただけだったという経験）を分析するなかから発展させられた理論。内発的発展の反対の概念として、「外来型発展」が対置される。「内発的発展」の成功例としては、金沢市（トヨタ自動車の前身、豊田織機などの産業連関の形成）、九州の湯布院の観光産業、北海道池田町ワインなどが注目されたが、いずれも現在は転換期を迎えている。大分の「一村一品運動」の評価は慎重論で、一品に依存するのは、ばくち戦略で、危ない面がある。より多様な地場産業の発展が展望される。

・海外での内発的発展論　たとえばブラジルの北東部のセアラ州の靴産業の研究（ジャイル・ド・アマラウ教授、セアラ連邦大学経済学大学院教授）。



写真は、ブラジルはセアラ州州都のフォルタレザの water front。山崎撮影。

ブラジルの内発的発展の例がみられる州

さて、内発的発展も、最後は「人」です。人が社会開発促進の主体です。人が元気でなければならぬ。そこで、つぎに「経済学と人の関係」をみてみます。経済学は、もともと人間学が濃厚にはいる形で発達し始めたのですが（アダム・スミスの『国富論』）、いつの間にか、人間学が経済学から消えた。最近、経済学へ人間論、倫理論、正義論などを再統合する学問的営みが、始まっています。それはおおきく2つあるように思います。1つは、「人間開発論」で、いま一つは限定合理性論（bounded rationality）とかかわった行動経済学です。順にこの2つを論じます。

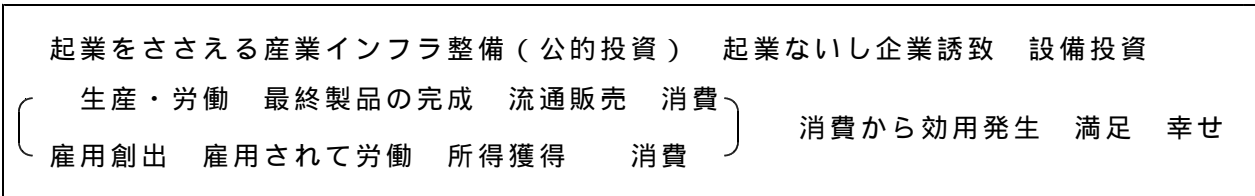
### 3 「人間開発」(human development) 論

#### 3 - 1 発達過程に着目する

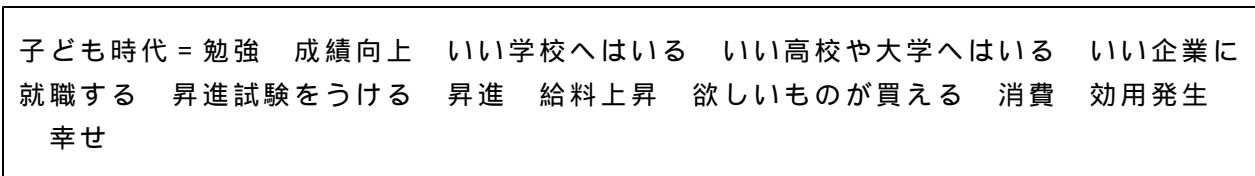
従来の経済学では、あらゆる学派を通じて、経済学の主要目的は市場均衡の達成のメカニズムの解明でした。それは、労働市場であれば完全雇用の達成であり、失業の解消であり、すなわち貧困問題の解決でした（＜貧困＝失業＞という単純な前提があった）。ですから、経済学は、基本的には、あらゆる学派が貧困解決を目的としています。マイロン・ショールズとか、ロバート・マートン（注1）みたいな、金儲けの話ばかりしてそんな学派もあるかに見える。でも、それもふくめて（金儲けもふくめて）、究極の目標は貧困解消であり、人間の苦からの解放です。これは右も左も、すべてに共通しています。ただしやっかいなのは、経済は常に成長していますので、成長しながらいかに均衡を達成させるかが、難題です。市場が静止しているならいいのですが、常に成長している市場で、どうやって均衡を達成させるか。これは「動学問題」といい、動く経済での均衡は無理だという悲観論を出している立場は、ジョン・ロビンソン女史らの「不均衡動学」の立場です。J. M. ケインズも基本的にその立場です。

注1：2人とも、1997年のノーベル経済学賞授賞者で、デリバティブ引のオプション評価モデルの開発で有名。98年に大破綻したLTCM（米国のヘッジファンド）に参画していたことでも有名。

いずれにせよ、従来の経済学の前提として、以下の「結果重視」の発想があると思われます。「過程」よりも、「結果」です。経済発展の目標は、貧困解消であり、つまり人間が幸せになることですが、その幸せを得るために、以下の過程が生じます。



「幸せ」に到着するまで、長すぎるんです。  
個人でみてみると、以下のようになります。



これを批判したのが、インド出身の経済学者のアマルティア・センでした。

過程こそから「幸せ」が得られると述べたのです。たとえば小学校で、体育の成績をよくするために逆上がりを練習する。でも上手にできない。結果、通信簿は駄目で2だった。でも、練習の過程で、筋力がついたかもしれない。「発達」したわけです。そのこと自体が「ありがたい」。喜んではどうでしょうか。1998年のロビン・ウィリアムズ主演の映画、Dead Poet Society（邦訳：今を生きる）じゃないですが、今、生きているこの瞬間を喜ぶということです。これが human development で、彼がいう、capability（ケイパビリティ）論なんです。

むろん、運動会など勝負は勝ちたい。勝つのが目的でいいんで、その意味では「結果重視」の発想を否定してはいけません。経済学はインセンティブ（行動を促す動機）を重視します。競争（勝利への執念または敗北への恐怖心ないし嫌悪感）は、重要なインセンティブなんです。でも、「過程」も大事だということです。競争に勝つことは重要ですが、その過程での「成長」も評価してはどうかという提案です。これはプロスポーツの世界でも、たとえば高校野球の高校生を観察しているプロ野球のリクルーターは、チームの勝ち負けだけでは判断しないわけで、負けたチームの選手がプロに推薦されることはよくあるし、「経過重視」の慣行も、さがせば例は少なくはない。

アマルティア・センは、人の幸福は、過程とか状態に依存するといいました。状態とは、（1）家族関係、（2）近隣や社会での位置、（3）社会のインフラ（下水道や安全な上水のあるなし）、（4）政治的自由（例：北朝鮮のような抑圧がないこと）、（5）自然環境（公害ないことなど）など。つまり、必死ではたらいで、稼いで、給料もらって、消費して、その結果えられる幸福ではなく、今の「状態」が幸福に関係するわけです。

夫婦関係、ご近所との関係、政府との関係などなど。今ある状態を「ありがたい」と思えるかどうか。

### 3 - 2 哲学的考察：発達論としての「弁証法」

むずかしくなりますが、これが「弁証法」と関係してきます。弁証法（dialectic）とは、AさんとBさんがわいわい議論しながら、AさんのA案でもなく、BさんのB案でもない、C案

にたどりついて、二人がそれを喜ぶという過程です。AとBから、Cへの発展は、止揚（アウフヘーベン、英語では sublation）といます。AさんもBさんも、妥協したんではない。C案は、どちらの案でもないが、どちらの人も賛成できる、さらに発展した「ありがたい」案です。具体例を挙げるのは、難しい。でも、何人かで会議していて、意見をたたかわせながら、最後に突然「それだ！」みたいな新案に達したなんてことは、ないでしょうか。それが弁証法の止揚です。この場合、重要なことは、C案はA案でもB案でもないが、その萌芽は、A案とB案の内部にあったということです。AとBのよい面が、発展的にC案の中に継承され、とけ込んでいます。ただし質的には変化しています。そして「否定の否定」（注2）が起こります。

これを社会の発展に応用すると、こうなります。社会の中にはいろいろ、対立する階級、階層、集団があります。一番対立するのは、やはり地主階級と資本家と労働者の3者です。地主の勢力は、市民革命や、日本では戦後のGHQ指導下の農地改革で、弱体化します。さて、現代の社会が次の新しい段階に移行するときには、資本と労働の対立は止揚されます。そのとき、資本と労働のよい面が継承されます。ビジネスが厳しい競争の中で生み出した技術革新、イノベーションは、継承されていきます。また労働者の能力の発展も、継承されます。労働者は、よく資本家にこきつかわれて、いじめられて、能力が衰退するかのよう描かれるかもしれませんが、その描き方は間違いで、労働者も成長しているわけです。今日風にいえば、生活者、市民、庶民、勤労者、サラリーマン、などなど、とにかくわれわれは仕事やバイトを通じて、日々成長し発達しています。

最近、小泉改革がきびしすぎて、社会が二極化して「格差社会」だと言われています。注意すべきは、格差が広がる中で「負け組」も成長しているという見方が重要です。「負け組」という言い方は、下品だし、人をさげすむ目線で話している感じですから、使わないほうがいいかも知れません。この点に留意しながら、使いましょう。2007年の参院選では与党が大敗しました。「負け組」の怒りが爆発したとも言えましょう。でも、これが政権交代にまでいきつくのでしょうか？そうなるかもしれないし、ならぬかもしれない。それはわかりませんが、「怒り」だけで政権交代したら、あとがたいへんです。交替したその夜から、「政策はどうするの」と、政策能力が問われる。与党を、怒りながら批判するのは得意だが、いざ自分が与党になったら、政策実行能力がないということでは、話にならない。

「負け組」、あるいは経済的弱者（失業者、低所得者、年金生活者、退職者、家事を主にする人つまり主婦や主夫、子ども、外国人労働者、差別されている人々などなど）は、成長しないといけないうし、また実際に成長しているとみるのが、弁証法的分析です。19世紀のマンチェスターとかリバプールとかの工場街や炭鉱労働はホントにひどかった。8時間労働制などもないので児童労働が蔓延し、子どもは使い捨てで酷使された。英国政府による工場監督官報告書というのがあり、児童労働の調査もされていますが、「キリストって誰？」という子どもが出てきます。1年365日酷使されて、まったく教育を受けていない。しかし経済学は、それをポジティブにみた（注）。「キリスト、知らんでもいいじゃん。そのほうがいいじゃん」という感覚。へたな教育うけているより、まっしろな分、邪教に汚されていない。日本の「負け組」も、お金がないから、細木 子さんの占いの本とか買ってないかもしれない。それはポジティブな面です。負けて、まけて、「もう、神も仏もあるもんか」って思っている。仏もないというのは困るが、神がいないと感じるのは、いいじゃん。だって創造主なんて、おらんし。

注2 ただし、19世紀の「人間発達論」も今日からみると、弱点があります。それは、主に労働過程だけを見ていたことにあると思います。「主に」というのは、工場外の都市環境なども念頭には入れていたので、完全に環境を無視してたわけではないが、環境への考察がよかった。今日、21世紀、人間発達論は、環境（外部経済、外部不経済）を考察にいれなければなりません。つまり環境悪化から、人間の諸能力が受ける影響（プラ

スとマイナスの影響)も、論じる必要があります。この点の分析は、19世紀の古典的経済学者は、弱かったのです。

他方、グローバル企業は、もうけてばかりだという批判もあるが、技術革新で生まれたよい部分は、環境技術、エコ技術なども含めて、将来に継承されていきます。弁証法での止揚というのは、今ある要素の否定ではなく、ポジティブな継承です(「否定の否定」注3)。

いま、この、たしかに狂った社会にみえるこの社会で、人間がどう変化しつつあるか。どう発達しつつあるか。人間は、ますます狂いつつあるのでしょうか？お先は真っ暗でしょうか？むろん、人間の変化は一様ではなく、尊属殺人が増えるなど、狂いつつもある。ネガティブな面も多い。しかしいろいろプラス、マイナスの両方を足したり引いたりしつつ総合すると、私は人間の変化を発達の視点からポジティブにみておくべきだと思います。20万人というノートにも、ポジティブな面があると思うのです。この人間発達の弁証法という、人間の変化の見方は、アクティブ・ブディズムの人間観につながってくると思います。

注3：「否定の否定」という難解な用語を用いましたが、意味は簡単。ものが発展・成長する時の一般的パターンを表現しているだけなんです。大麦の粒が、地面に撒かれると、粒はなくなり芽がでて茎と葉が出てくる。それは、麦の粒が「否定」されたわけです。やがてさらに成長し、収穫時になると、茎や葉は最後にまた麦の粒(しかもたくさん)を生み出し、本体は枯れる。「否定されたものが、また否定」されたことになる。〈種子 植物 多数の種子〉という発展過程は、「否定の否定」の過程で、これは生物界によくある発展・発達のパターンです。数学にもあります。aにマイナス1を乗じると、-aになります。aが否定されたのです。そのマイナスaに、さらに-aをかけると、 $(-a) \times (-a) = a^2$ になります。これは否定がさらに否定されたわけです。最初に否定されてできたマイナスaが、さらに否定されて、プラスになりました。「否定の否定」によって、〈aの二乗〉という高次の数字が生まれました。「否定の否定」は、すばらしい拡大や成長を含む嬉しい過程なのです。

弁証法的発展過程には、3つの法則があります。それらは、量から質への転化、対立物の相互浸透、否定の否定です。これはヘーゲルが洗練させた弁証法の見方です。いま、3つめの「否定の否定」を説明しましたが、いずれも簡単なことで、日常生活にみられる、当たり前のことなのです。

弁証法には3つの時代があります。

ギリシャ哲学時代の弁証法、カントからヘーゲルにいたるドイツ古典哲学者によって展開された弁証法(これは観念論的弁証法といわれる)、マルクスやエンゲルスらによって展開された弁証法です(これは唯物論的弁証法といわれる)。いずれもすばらしさがあります。違いの説明は省略しますが、その違いは、こうです。ヘーゲルは「現実の世界は理念の模写だ」といい、人間が弁証法的に理解するから、現実も弁証法的に発展するという考えだったのに対して、F・エンゲルスは、現実そのものが弁証法的に発展していると述べたのです。「弁証法って、ヘーゲルがいうような〈神秘的な〉過程じゃない。日常生活どこにでもころがっている、生物、数学、化学、物理学、あらゆる分野で観察される、ごく普通の発展過程だ」という趣旨の議論を「自然の弁証法」(1873年~83年に執筆)という大論文で展開しました。「観念論」については、最後にまた補足します。(上写真は、本文とは無関係。ブラジルのオリнда市)

### 3 - 3 非線形科学

(1) 弁証法について説明しましたが、哲学の最前線はどうなっているのでしょうか？本屋さんへいくと、哲学、思想、宗教、音楽などの棚が違いに近い場所にあります。だいたいみていると、本当に難しいのです。哲学は、むろん、ショーペンハウアーやヘーゲルだけではありません。以下のような理論家が現代哲学では、有名です。

ベルクソン、フロイト、チューイ、ジェイムズ、カルナップ、フッサール、ヤスパース、ハイデッガー、アドルノ、ホルクハイマー、ウイトゲンシュタイン、サルトル、ソシュール、メルロ＝ポンティ、フーコー、ハーバーマス、クワイン、レヴィナス、ヨナス、ガダマーなどです。このなかで、人間発達に関連するのは、私はハーバーマスだと思います。かれは、コミュニケーションの重要性を指摘し、人間はコミュニケーションを通じて発達しあうといいました。市場は、コミュニケーションを切り裂きます。人と人が関係しあうことは、人間の発達にとって、非常に大切です。

わたしはどっちかという、「あっさり人間」で仲間意識が希薄なほうですが、資本主義社会、市場社会の影響かもしれません。

(2) エンゲルスは、工場を経営する商売人・ビジネスマンで、かつ自然科学者でもあり、19世紀の自然科学の最前線をとりにこんで、「自然の弁証法」(弁証法的発展は自然界に普通にみられること)を唯物論的に論じました。現代は、量子力学の世界になってきていて、観察するかしないかで存在が変わるといふ、観念論のような現象が量子レベルでは観察されます。唯物論はまちがいだったのか。また「自然の弁証法」は、現代の科学的知見と整合するのか。本屋さんで書棚をみても、この関心に答えてくれる本は、普通の書店ではみあたりません。

こうなると哲学書をもててもわからないので、別の書籍コーナーへいったほうがいい。そこで目にとまるのが、藤本由紀の『非線型科学』(集英社、2007年9月)である。新しい視点から、自然界の法則を説いておられる。「ゆらぎ」「フラクタル」「カオス」などがキーワードになっています。これを読んでいると、「非線形科学」で叙述される現象は、「自然の弁証法」といえる現象だと思えます。

こうした自然科学の最先端の流れと、仏教経済学の間接関係をどうとっていくかは、今後の課題としたいと思います。

#### (3) 非線型科学

科学は、粒子をさらに細かく細かく分析していく方向でつきすすんできた。部分部分をどんどん拡大していく方向で。そうしてヒトゲノムの解読もおわった。しかし、部分のみを、全体をみない傾向がある。物理学でも、量子までみているが、人が普通に生活するスケールで生じている複雑な、あるいは「フラクタルな」現象、「ゆらぎ(fluctuation)」の現象、「カオス」などが、見過ごされてきた。医学でも、臓器の部分部分のみを治療するが、患者さん全体の精神面も含めた健康度合いを診断・改善する方法が、確立しているとはいえない。分子レベルの運動は、比較的、線型システムで叙述できるらしい。エネルギーがふえれば運動量が比例的に増えるなどは、線型の変化だ。線型とは、一次方程式( $y = ax + b$ )でかけるグラフで、たとえば右肩上がりの一直線(曲線ではなく)になることである。二次方程式( $y = ax^2 + bx + c$ )は駄目。これはU字(ないし逆U字)のようなカーブになり、非線形である。要素分解型の学問では、線型科学でいいのだが、全体の動きをみるとなると、偶然に左右されて変化することもおおく、非線形的な数理解析が適切らしい。

非線型システムでは、グラフは途中でまがる。急上昇したり、下落したり。これは、量的変化が質的变化となる場合に類似している。人の能力の発達、急にある日に複雑な割り算(算数)や逆上がりや懸垂(体育)ができるようになるとか、変化の曲線は「非線型」だ。途中で練習がいやになって、下手になるとかも、下降方向の変化で、「非線型」だ。こうした人間や社会や生物界の発達・変化は、前に書いたように「弁証法的」発展・衰退の過程だが、まさに

その発展過程を蔵本教授は非線形という物理学・数学の表現で分析しておられる。この本の内容と、弁証法がすごく似ていると感じた。

人間の発達や社会の発展は質的变化を伴うので、非線型科学の領域である。弁証法では、社会や生物などあらゆるものは、生成・発展・消滅し、その発展過程は「質的变化」、「否定の否定」、「対立物の相互浸透」を含む。弁証法も、ギリシャ時代の弁証法以来、細部よりも全体の観察を重視する。蔵本教授がかいておられるのは、まさに弁証法的発展過程の話と大部分が重複すると感じる。＜「散逸」「崩壊」「再構造化」＞も、非線型科学で既述できる興味深いプロセスの典型らしい。この本の19頁（プロローグ）と26頁（第1章）から、印象深い文章を引用しておきたい。

\* 「生きた自然」への驚きを数理の言葉に乗せる本格的な科学が、ここにはじめて登場したといえるでしょう。とりわけ、形や動きが崩壊に向かうように運命づけられているかに見えるこのマクロ世界で、それに抗するかのよう新しい形や動きが生み出されつつあるという事実は、その理由が科学的に一応明らかになった現在でも、つねに新鮮な驚きを私たちに与え続けています。本書で紹介するのも、そのような驚きを原動力とする探究心をもたらした科学的成果の数々です。＜19頁（プロローグ）＞

\* 「散逸」と「構造(形成)」は一見相反する概念のように見えます。エネルギーのたえない散逸の中から立ち現われる構造を意味する「散逸構造」は、その逆説性もあってでしょうか、鮮烈な印象を人々に与えました。同書はプリゴジンのこの偉業を踏まえたものです。もっとも、その後の非線形科学のめざましい展開は、プリゴジンたちの想像をはるかに超えるものだったに違いありません。しかし、一つの新しい科学の可能性を提示し、次世代を担う多くの研究者を鼓舞して、それに立ち向かわせたという点で、同書（『構造・安定性・ゆらぎ その熱力学的理論』のこと：引用者補足）は不滅の価値をもつといえるでしょう。＜26頁（第1章）＞

弁証法という用語がちょっと古くさくて、嫌だという御仁には、今後この非線型科学という表現を使ってもよいかも知れない。偶然による「変化」、つまり偶然の領域を「科学する」ということは、結局「見えない世界」を科学したユング心理学（集合無意識論など）などとも通底します。

いずれにせよ、私の関心は「社会の発展」と「人間の発達」にあり、蔵本教授のこの本は（肉眼でみえるレベルの）「生きた自然」（かならずしも生物だけに限定されない）を対象としている。この本にはあまり社会発展や人間の成長の話は出てこない。それでも、社会科学に示唆の多い本だと思ったので、検討してみました。

#### 4 行動経済学（Behavioral Economics）、神経経済学（Neuroeconomics）

人間の経済行動が、合理性を欠くことを、「限定合理性」（bounded rationality）という。計算よりも感情に左右されるというのである。これはたしかにそうである。その点を分析する最先端の理論が、行動経済学や神経経済学で、先駆者の一人ダニエル・カーネマン（プリンストン大）はこれで2002年のノーベル経済学賞をとっている。

・株への投資：コカ・コーラ社の株の2割弱はアトランタ州民が保有する。なじみでの投資。郷土愛からの投資。地元の会社が安全な銘柄だというのは、錯覚だという。私自身はそうした郷土愛は大賛成だが、純粋に経済的に合理的行動かどうかというと、むろんそうとは断定できない。郷土愛にもとづく投資が不合理でありうる。そういえば、地方財政学では、「縁故債」というのがある。

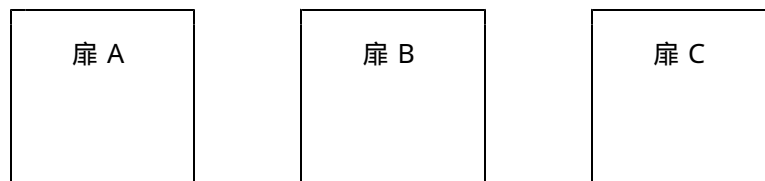
・確率：コインを投げるとする。投げる前に、表が出るか裏がでるかをかけてもらう。掛け金

は自由。さて、投げてから、結果を示さずに、また賭けてもらう。掛け金は減るらしい。投げる前だと、確率を念じたりすることで左右できると、「錯覚」する。感情で、掛け金がかわってくる。数学的には、投げる前も投げた後も、いずれも確率はかわらない。

・賃金：インフレ率 8 % 社会で 5 % の賃上げとなるのと、インフレ率 0 % の社会でマイナス 2 % の賃下げとなるのでは、どちらがいいですか？「感情的」に、前者を選ぶ人が多い。冷静に、合理的に判断すると、後者のほうがまし。

・確率ゲーム：

3つのドアがあり1つをまず選ぶ。まだ開けない。すると、あとのうちいずれがはずれかをおしえてもらえる。たとえばAを選ぶと、BとCのいずれがはずれかをおしえてもらえる。たとえば、Cがはずれだと教えてもらえる。さて、ここで、選択の変更が可能である。あなたは、いま、Cがはずれだとして、扉をBに変更するか、Aのままにするか？どちらが、当たる確率が高いでしょうか。



	A	B	C
1	当たり	はずれ	はずれ
2	はずれ	当たり	はずれ
3	はずれ	はずれ	当たり

これはほとんどの数学者が間違えたいらしいですが、正解は、「選択を変更する」です。変更したほうが、当たる確率が高いのです。でも、普通は計算を間違い、感覚にしたがってしまうので、変えない人が多いらしい。

変更すると当たる確率は、50%ではなく、実は66% (2/3) なのです。Aがあたっている可能性は1/3ですね。BかCがあたっている可能性は2/3あり、いまどちらがはずれかは教えてもらったのですが、これは要するにBとCの両方を開けて当たったほうをもらうとすることに等しい。だから、当たる可能性は2/3あるわけです。変更したほうが、得なのです。でも、2/3もある確率をえらばず、通常は1/2だと「感情的に」考えてしまい、あえてリスクをとらないのです。

こうした研究の基礎を築いたのが、ダニエル・カーネマンでした。共同研究者であった故エイモス・トヴェルスキーと、行動経済学の基礎をつくったわけです。経済学に、人間の心理の分析を復縁させたわけで、経済学を一步、「仏教経済学」に近づけたかもしれません。しかし、人間の幸福について論じたわけではない。あくまで経済行動の合理性・非合理性と人間の心理や感情の分析です。その意味では、近づいたようにはみえるが、まだまだ距離があります。

## 5 科学（経済学）と宗教（仏教）

### 5 - 1 経済学と仏教の接合

以上、仏教からは「アジアの社会行動仏教」「内発的發展」が、経済学からは「人間開発論」「行動経済学（神経経済学）」「弁証法的發展」「内発的發展論」「非線形科学」が、経済学と仏教のつなぎ役・接着剤・ブリッジ（架橋）として、提供されました。仏教と経済学は、「人間学」という接着剤で結びついています。とはいえ、仏教（宗教）と経済学（科学）は、対立する面もあります。キリスト教の發展と科学の發展についての「闘争史観」という呼び方もあるようです。次にこの点を検討します。

宗教は一般に心霊世界を扱います。仏教や原始キリスト教やバラモン教（古代インド）には、過去世、来世といった考え方がありま。経済学をふくめた社会科学ないしサイエンスは、一般に心霊世界を否定します。この点は、仏教と経済学を接合するときの、最大の難関となります。本日の講義でこの難関を克服できるわけではありませんが、この点に関して、従来の議論をふりかえっておきましょう。社会科学はいかに宗教を批判し否定してきたか。あるいは、社会科学はどの程度、宗教を否定してきたか。

## 5 - 2 社会科学による宗教批判

宗教を否定したサイエンスの代表といえば、おそらく「宗教は阿片だ」といったK・マルクスでしょう。「宗教 = 阿片」論はあとに回すとして、まずマルクスもエンゲルスも心霊を認めていないと思います。しかし宗教そのものについては、完全否定ではなく、以下のように宗教に一定の意義を認めています。

(1)「ブルジョアジーは、歴史上きわめて革命的な役割を演じた。ブルジョアジーは、支配権をにぎったところではどこでも、封建的、家父長制的、牧歌的な諸関係を、のこらず破壊した。人々をその生まれながらの長上に結びつけていた、色とりどりの封建的なきずなを容赦なくひきちぎって、人と人のあいだの赤裸々な利害、無情な「現金勘定」のほかには、どんなきずなも残さなかった。信仰の熱狂、騎士の感激、町人の感傷という聖なる恍惚感を、氷のように冷たい利己的な打算の水におぼらせた。」(『共産党宣言』)。「信仰の熱狂」「聖なる恍惚感」とか、おもしろい表現です。皮肉なのでしょうか。わかりませんが、「聖なる恍惚感」を消滅させたのは、資本主義的近代化だというわけです。ちょっと「聖なる恍惚感」の消滅を惜んでいるようにも、読めなくはないです。

(2)また宗教を否定する場合は、世俗権力と結びついて墮落したキリスト教会を念頭においていたようで、その限りでは批判は正当だったといえます。

1848年の「共産党宣言」は、当時山ほど跋扈していた有象無象の社会主義運動を整理・批判して、彼らが正しいと考えるところの社会主義像を提案したものです。そこでは、反動的な社会主義として

- ・封建的社会主義
- ・小ブルジョア社会主義
- ・ドイツ社会主義
- ・ブルジョア社会主義
- ・ユートピア的社会主義

などが、次々と批判され、斬られています。『共産党宣言』は、その意味では社会主義批判の本なんですが、そこでキリスト教社会主義も批判しています。以下のとおり。坊主という訳がいいのかどうか、原典のドイツ語で原語を確認してませんから、なんともいえませんが：

「坊主がいつも封建領主と手を携えていたように、坊主社会主義が封建的社会主義と手を携えている。キリスト教の禁欲主義を社会主義的に色あげするほど、やさしいことはない。キリスト教も、私的所有にたいし、婚姻にたいし、国家にたいして、激しく反対したではなかったか?そういうもののかわりに、慈善と托鉢、独身と禁欲、僧房生活と教会を、説いたではなかったか。キリスト教社会主義は貴族の憤怒を清めるために坊主がそそぐ聖水にすぎない。」(『ME全集』第4巻、497頁)。

(3)「反デューリング論」では、デューリング氏の社会主義論が批判されています。同氏は独特の社会主義論を展開するのですが、「デューリング式」社会主義では宗教は禁止されています。これに対して、エンゲルスは反撃を加えています。禁止するなというわけです。社会に搾取や苦しみがなくなれば、宗教は「自然死」するというのが、エンゲルスの「反デューリング論」における思想でした。いずれにせよ、エンゲルスの社会主義論では、当面は宗教は共存する相手として扱われています。

いいかえれば、エンゲルスは、宗教依存の原因は現世の苦しみにあり、それを現世的な手法で(つまり社会主義革命で)なくせば、「宗教的反映」は自然消滅すると考えてました。しか

し、現世的な苦しみがそうすぐに解消するとは想定してませんでしたので、当面は宗教への二一ズは残るし、宗教組織も継続すると想定してました。無理な、強制的な宗教の禁止には、反対してました（『ME全集』第20巻、326頁 - 327頁）。

さてアジアは今、「仏教ルネッサンス」状態で、「社会行動仏教」とか「仏教社会主義」までが出てきているわけです。これは、上記の（2）で書いた、「封建権力と手をむすんだ坊主による、封建的社会主義」とは、異なると思います。この状況をみたらマルクスはなんというか、わかりませんが、私は否定しないかも知れないと、想像します。ラテンアメリカの「解放の神学」も、おそらく彼は賛同するでしょう。仏教ルネッサンスや解放の神学は、数世紀の歴史のなかでは参照する対照がない、まったく新しい動きではないかと思えます。

### 5 - 3 「宗教は阿片」論

さて例の「宗教は阿片」だという主張についてです。マルクスが宗教を阿片だといったのは、「ヘーゲル法哲学批判」（注4）という短い論文で、あとにも先にも、そこだけのようです。

彼の「宗教阿片論」をわたしなりにまとめると、「民衆は、階級闘争を通じて支配者を権力から引きずり下ろして、政権交代を実現し、その後理想の社会をつくるべきである。そうしないと、人間は本当の幸福を手にはすることはできない。宗教は人々を阿片中毒者のように眠らせて、この残酷な世界に安住することを永続化させてしまう。それは支配者にとっては好都合であるが、民衆の本当の利益にはならない。そのように人々を眠らせることに躍起になっている、専制君主と結びついたキリスト教会は、けしからん」といった趣旨だったと思えます。

注4：『マルクス・エンゲルス全集』（全41巻＋補巻4冊＋別冊索引集3冊）第1巻、415頁～428頁。「阿片」は、その冒頭にでてくる。これは1843年から44年にかけて執筆された論考で、1844年の『独仏年誌』に所収された。

### 5 - 4 K . マルクス哲学の欠陥は何か。

彼の哲学には限界・weakness（弱点）がありました。かれは信行を深めることと、社会行動をとることが、両立しないと考えてしまった。そこが弱点でななかったか。アジアの「仏教ルネッサンス」をみていると、信行・信仰と社会行動は両立するとおもいます。たしかに当時の19世紀の西欧社会の、国家権力と結びついたキリスト教をみていたら、そう思ったのかも知れないですが。

さて、スピリチャルな世界の扱いについては、どうでしょうか。マルクスとエンゲルスが観念論に対して唯物論にたったのは、仏教的にみても正しかったといえるのではないかと、私は思います（注5）。そして、「人間の発達」を論じたまではよかったのですが、心の問題にまで立ち入らなかった。「スピリチャルな」問題に立ち入らなかった。その後、経済学も社会科学も、心の荒廃の問題、精神の荒廃の問題が、なかなか解けていません。

近年米国の精神病患者さんが、精神の安定の回復のための治療プログラムに、「神」を導入しているそうです。神に祈り、懺悔するそうです。12のステップがあって、最後の第12番目は、神からの御利益をほかの苦しむ患者さんに伝えなさいとあります。これは、英語学習誌『English Zone』（No. 4、2003年7月、中経出版）の中にある「Mental Health Recovery in 12 Steps」（著者 Daniel Yee）という記事に書いてありました。心の問題に深くとりこんでいくと、最後は、（1）something greatの存在を信じること、（2）それを人に伝える（御教化する）という行動が、ベストの治療法だという結論にいきつらしいのです。

経済学の世界（サイエンス）と、仏教の世界（宗教）をつなぐには、このスピリチャリティに関する溝を埋めるといふ大仕事があります。これは観念論、唯物論、認識論を含み、私には手に負えない難題です。哲学やもっと深い分野がからんでくるやっかいなテーマです。

注5：観念論と唯物論の対立について、仏教はどちらの立場をとるのか、私は勉強不足で、論じる資格はありませんが、さしあたり、次のように思います。観念論というのは、現実よりも理念、思想、観念に重きをおき、「現実はその思索の反映にすぎない」とみるのです。これは、どう考えてもおかしいと、私は思います。現実はやっぱり、われわれがどうみるかに依存せずに、存在するのではないのでしょうか。仏教は、自然現象をそのまま受け入れ、それをそのまま、あるがまま観察し、因果関係をみきわめようとするのじゃないかと、思うのですが、どうでしょうか。ギリシャ哲学の時代から、弁証法もそうでした。その後の弁証法の発展をふくめて、仏教の見方は、基本的に弁証法や唯物論とかなり整合的ではないのでしょうか。

ですから、社会科学がスピリチュアルな世界を無視してきたことという話を、この観念論か唯物論かの対立に関係させないほうがよいのではないかと考えています。観念論か、唯物論かじゃなくて、新しい論点として、スピリチュリティの問題があるということではないのでしょうか。

宇宙物理学や医学などサイエンスの最先端を紹介する仕事を重ねている「知の巨人」立花隆（ジャーナリズム）さんも、臨死体験の本を出しておられ、多くの体験者の証言に共通性があることに注目されています。

## 6 まとめ

スピリチュリティの扱いはペンディングにしますが、ほかの点では、「人間の発達」「内発的発展」「社会行動」などが接着剤となって、経済学と仏教は結びつきます。それは、シューマッハがいったような、節制とか「小さな技術」とかいったことを奨励するタイプの儉約思想の仏教経済学とはかなり異なる、よりアクティブな「仏教経済学」だと思います。地球温暖化にも、たんに「個人が儉約しましょう」じゃなくて、もっとアクティブに、技術革新や社会システムの構造改革を通じて、取り組むのだと私は考えてます。

### <参考文献リスト>

- B．R．アンベードカル著、山際素男訳『ブッダとそのダンマ』光文社、2004年
- 蔵本由紀著『非線型科学』集英社、2007年9月19日発行（新書版、700円＋税）
- 友野典男『行動経済学 経済は「感情」で動いている』光文社、2006年
- 西川潤・野田真里編著『仏教・開発・NGO』新評論、2001年
- 野村亨・山本純一編著『グローバル・ナショナル・ローカルの現在』慶応義塾大学出版会、2006年に所収されている、野田真里「(第7章)グローバル危機と社会行動仏教による人間の安全保障」